必要。

↓地域福祉活動の中で、アプローチしていくことが大事。地域福祉活動としてのアプローチは、仲間作りである。「仲間づくり」をすることによって、サービスの利用が飛躍的に伸びる

■苦情処理は公に近い社協が担うべき

助言者のまとめ

■介護保険という課題に焦点を当てて、ケアワークを支えるコミュニティワークをどう捉えるのかが課題である。

■ケアワークは、対人場面に集中して、仕事をする。その視点をコミュニティワークに重ね合わせていく方向性を見出す。地域福祉としてのケアワークが必要である。

■共同の領域として

①介護意識の社会化

ケアワークを地域福祉の中でどう取り上げていくのか「ネタは、ケアワークの現場にしかない」

②介護行動の社会化

・在宅介護者など当事者の組織化

・見守りなどの近隣住民の組織化

・住民主体によるあてになるサービスの展開

最後に・・・

・忙しい現場ですが、くれぐれも体に気をつけて・・・

・職場内でのコミュニケーションが必要。信頼関係を作らないと人は動かない。まず、職種を超えておたがいの信頼関係を作ってください。

ということでした。

第5分科会
地域を支える（愛する）住民参加

報告／大里　京子（山田市社協）

第5分科会では、社協職員として、また、地域住民として、住民参加の福祉のまちづくりに、どう関わっていくかということに視点を置いて考えてみました。誰もが安心して暮らせる地域社会づくりを目指すためには、何が必要なのか、どうあるべきなのか、等々。分かっているようでなかなか難しいこの問題について、三名の発題者からの貴重なお話しを基に、グループ討議や意見交換を行い、協議した内容について報告します。

まず、NPO法人たすけ愛　京築の阿部かおりさんより、

・一人で何かをやろうとしても、なかなかできるものではない。まして、継続してやっていくには、人の手助けが必要であり、計画を立て、組織化することで、必要とする人にできる人が手を貸し、お互いに助けあう「住民互助」という型が、平等な関係で成り立つ。

・地域の問題を掘り起こし、それをうまく社会資源の利用に結びつける。

・思うだけでは何も育たない。小さなことからでも、一歩、一歩、動くことから始める。

・いろんな点の部分をつないで線になり、さらに面にしていくことが、ネットワーキングであり、大きなパワーとなる。

・社協も時代背景を踏まえて、危機感を持ち、新しい発想で個性・特色のあるカラーを打ち出す仕掛けが必要。

以上のような活動を通しての意見をいただきました。

次に、筑後市社協の長野誠氏より、社協がボランティアと、どう関わってきたかの経緯と、その課題についての報告がありました。

・当事者からの情報を調査し、ボランティアグループとして組織化する必要性を把握したうえで、立ち上げに協力する。

・グループとして立ち上げたあと、どこまで手を貸していくか、グループとして一人立ちしてもらうために、どこで手を引くか、そのタイミングを判断するのが難しく、また、グループの運営とどう関わっていくかが、今後の課題である。

・地域において、対等の立場でボランティアや住民とのつながりを広げていくためには、社協職員も、一ボランティアとして活動することも必要。

また、久留米大学助教授、松尾誠治郎先生からは、

・住民の中に入り、声を聞き、住民と対話することで、地域のニーズをどれだけ拾い出せるか。新しい空気を取り込み、必要であれば組織化していくことで、住民とともに共有体験しながらともに歩く姿勢は大事。

・「住民は出番を待っている。」

必要性を語りかけ、自分がやりたい、と思っている人を「この指、と～まれ」で募っていく。共感性を持って、出番を待つ住民からは、大きなパワーがはね返ってくる。

以上のような話の中から、少しは何かが見えてきたという思いになりました。参加者からも、住民に自分の思い

をどれくらい伝えられるか、相手のハートを動かす手法をどこまで使うことができるかが大事との声もありました。

まとめとして、社協という組織としての姿勢よりも、職員である私たち一人ひとりが、住民参加の福祉のまちづくりのために、どういう思いで臨もうとしているか、また、地域に向けて、自分自身をどう発信できるか、その姿勢に大きなキーポイントがあるということでした。職員が共通の意識を持って創意工夫しながら取り組んでいくことが、地域を支える住民参加のまちづくりにつながるという思いを新たにして、分科会を終了しました。

第6分科会
ホッと一息 リフレッシュ!!

報告／城川　美樹（矢部村社協）

第6分科会は、「ゆとり」をテーマに分科会を計画しました。

分科会のテーマに「ゆとり」を取り上げた理由は、今回実施した「社協職員のつどい」に関するアンケート調査にあります。

調査の結果、「あなたは忙しい中にもゆとりを保てていますか?」の問いに、半数以上の方が「いいえ」と回答しており、忙しさにゆとりが持てず、仕事に何らかのストレスを感じていることがわかったからです。

ゆとりがなければ、本当の笑顔もでないし、良い仕事も出来ません。

そこで、忙しさを代わってあげることはできませんが、この分科会に参加することでストレスを発散し、気持ちをリフレッシュして、明日への活力につなげてもらえればと思い、「ゆとり」を実体験できる分科会を考えました。

一日目は、ヒューマンコミュニケーション研究所の添田譲二先生をお迎えして、レクリエーションの指導をしていただきました。

添田先生のレクリエーションは、頭や身体をつかって、最初から最後まで笑いと感動がいっぱいで、自然のうちに皆が仲良くなり、心から楽しむことができました。

教えていただいたゲームや手品は、職場に持ち帰って、デイサービス等で役立てていただけると思います。

レクリエーションの後は、皆の心が和んだところで、全員にストレス度チェックをしてもらい、自分のストレス度を認識してもらったうえで、「ストレスの発散方法やゆとりの持ち方について」グループに分かれて話し合ってもらいました。

その結果、ストレス解消のためスポーツで汗を流したり、お食事や買い物、温泉等に行ったりして自分のための時間をつくることが大切、「ゆとり」を持てるかどうかは、個人の気の持ちよう、仕事とプライベートをきちんと区別して気分を変えるようにしなければならない、という意見にまとまりました。

添田先生からも、『気分を変える方法』を教えていただきました。

『気分を変える方法』

一、人を変える。
二、場所を変える。
三、空気を変える。
四、時間を捨ててみる。

「あなたがいなくても職場は回るのだから、仕事に区切りをつけて、たまには、違う場所に行き、違う空気を吸い、新しい人と出会いましょう。そして、そこで感動したことを次の人に伝えてあげましょう。行動を変える意識を持つことが大切なのです。」と、「ゆとり」を持つヒントをいただきました。

二日目は、思考を変えて、クラフト・手芸体験として、個人のペースで学べるように出店形式で準備し、実際に手作りを楽しんでいただきました。

牛乳パックを材料に、帽子や椅子、ポケットティッシュケース、色合わせサイコロや、ハンガーで作るリースなどの作品ができました。

参加した方には、レクリエーションやリハビリに役立ててもらうよう、リサイクル手芸から簡単な介護グッズの作り方を載せた手作りの冊子を持って帰っていただきました。

二日間を通して、第6分科会では、「ゆとり」を頭で考えるだけでなく、「ゆとり」を実体験してもらおうと思い実行しました。

参加者のひとりから、「この研修会に参加することがストレス発散の一つになりました。」との声をいただきました。まさに、この分科会のねらいはそれでした。

きっと、参加していただいた方には、笑顔・感動・出会い・明日への活力、何かをプレゼントできたのではないかと思います。

女性三人の実行委員でこの分科会を企画しました。新しいスタイルの分科会で、準備等大変でしたし、反省する点は多々ありますが、終えてみて、少

しは、満足できる成果が得られたのではないかと思っています。

また、この報告書を読んで、参加して良かった、来年は参加しようと思っていただけると幸いです。

第7分科会 IT戦略会議in社協

報告／國武　竜（浮羽町社協）

はじめに

社協という所は、非常に多くの情報を有している？ところです。福祉の制度、社会資源、イベント、要援護者個人データもろもろ、当然書類もいっぱいで、数日休もうものなら、机の上に書類が山積みされ憂鬱になることもしばしば…　このような現状ですが、どの情報も切り捨てていくわけにもいかず、いかに上手に情報を収集し整理し、蓄積し、自在に提供したり広報したり出来るようにならなくては、せっかくのお宝（情報）も宝の持ち腐れになってしまいます。

そこで、各社協の内部では『マニア』と呼ばれそうな方々にお集まりいただき、ITについての基礎学習と今後の展望について話し合っていただきました。

IT（高度情報技術）とは

あまり詳しく言っても分からないと思いますので、簡単に言うならば、『情報の蓄積』『情報の通信』『情報の活用』ということであるようです。中には、【IT＝パソコンを使えること】と間違えた理解をされている方もおられるかもしれませんが、それははっきり言いますが間違いです！

パソコンを使えるにこしたことはないのですが、今はいかに簡単に情報の取引ができるかが、競って開発されており、携帯電話のi-modeやマルチメディアゲーム機であるプレステⅡなど、キーボードを叩く必要がなく、気軽にインターネットに入っていけます。今後はもっと簡単に、一般家電製品でも、一声かければ『情報通』になれる時代になりそうです。また、インターネットは電話回線で行うものと認識されていがちですが、今からは、無線や衛星通信を使ったもの、光ケーブルといった新たな媒体が、庶民価格で利用できるように日々研究されているので、すぐにISDNなんて古いねといわれるようになりそうです。要は情報を出す側も受ける側も簡単になって、とにかく便利な世の中になりますよということです。

ただし…

有用性と危険性が裏腹

情報の交換は、相手がいてからはじめて成り立つもので、一方的に情報の垂れ流しや、何でもかんでも受け入れますでは、機械に振り回されるだけになります。

また、たとえば悪意の情報発信者がいた場合には、「○○社協では職員を一○○人募集しています」と○○社協名で発信された場合、本当かどうか確かめる術が今のところありませんので、受け手にしっかりした判断能力が要求されます。今後は認証システムなどが確立されてくると思いますが、それまでは情報の判断能力が問われます。

先生のまとめでは、

- ITという言葉に振り回されない
- 役に立つ情報技術をしっかり知る
- 大量の情報に対する耐性をつける
- 情報量に対する感覚を持つ
- 危険性や問題に立ち向かう気迫

が必要

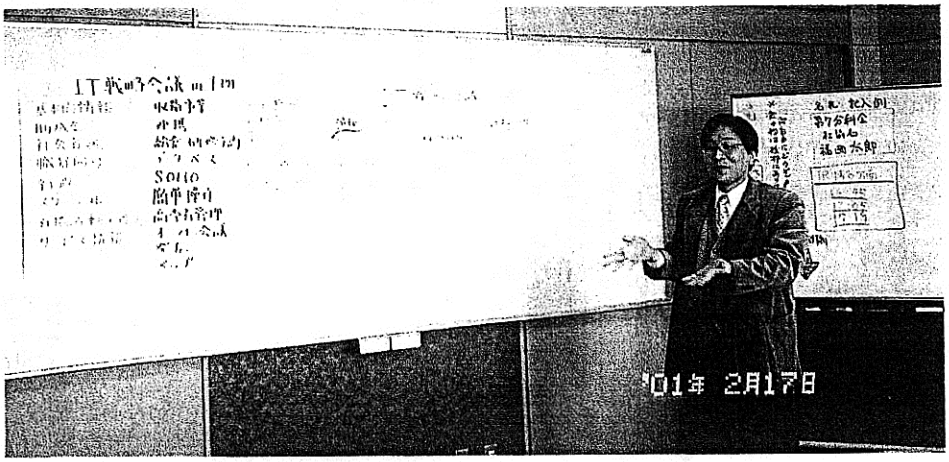
ということでした。

まあ、自分のペースで出来ることからITに関わってください。

今後の社協IT化の展望を考える会発足

分科会は、講義とグループワークで構成されましたが、後者では各自の情報に対する意見を出し合いました。それぞれに重要な要素が多くて、まとめあげは出来ませんでしたが、有志が集まって意見が交換できて、後につながったことは非常に大きな成果でした。今は情報センターの勝野さん主導で、ネット上での意見交換がなされています。『集まらなくていい会議』を行って、時間を有効に使うためにも、このような取り組みを理解していただき、二○○二年までに福岡県下社協ネットの実現化を目指したいものです。

地職連の中にも是非、特別委員会を設置して極めて前向きに検討していきましょう！



第8分科会 今だから学ぼう 地域福祉と社協

報告／森 智恵子（鞍手町社協）

この分科会は、社会福祉協議会という組織の中で働いているが、それぞれが社協に対する想いや、日頃から自分たちの抱えている悩み・疑問点を出し合いながら、「社協とは・・」「地域福祉とは・・」について、三塚先生とともに語り合う分科会でした。

まず、三塚先生を囲み一四社協一五名の社協マンでフリートーク形式で始めました。その意見を集約すると、①社協は、基本的に何をやればいいのか、どこまでやればいいのか。また、裾野を広げようと思っても無限であり、事業も高齢者問題が主で新規事業をやりたくてもなかなか難しい、と思いながら日々業務に追われている現状である。②ボランティアと地域福祉活動に対しても、頭では理解できていても実際に機能していないし、どうすればよいのかわからない。③社協と行政の区別関わり（関係）についてどうなんだろう等々、問題提起があり、三塚先生からの助言、補足説明をいただきました。

☆暮らしの問題☆

「地域福祉」活動の問題は、住民の暮らしの問題であり、社協マンとして住民の暮らしの実態を知ること。これは、地域に出向いて常に住民と対話し、住民と対峙するのではなく、住民とともに（一緒に）取り組むことが大切であり、対等・平等の立場で、互いにその地域の問題点を把握し、取り組む課題をはっきりさせることが大事である。

☆住民が主人公☆

また、地域福祉の一環である「まちづくり」は、それぞれ地域に住んでいる住民が主人公であり、住民の自治能力を高めるためにも活動の担い手は誰なのかをはっきりとし、その担い手を育てていくことが大事である。暮らしに関わる活動だからこそ息の長い取り組みを必要とし、活動を通じて人を組織することが大切である。それらは社協マンの仕事であり、住民と一緒に取り組むことが必要ではないだろうか。

一例として、一人暮らしの老人のお食事会、サロン等みんなが集まって話し合う中で、こんなことで困っている、こんなことを願っている、ということがわかり、それを支える間柄、条件をどうつくるのか、組織をどう広げていくべきか（横のつながりと協力）ということが地域福祉活動であり、組織化活動ではないかと考えられる。

☆自ら学習していますか・・・☆

さらには、何をどうやるかということは、職場の中や職員間で学習会を開き、気軽に語り合える場づくりを目指しながら、一緒に考え活動してくれる仲間作りをする。そのためには、社協マンは、地域に積極的に出向き地域を知る（地域を見る眼を養う）ことが大事であり、何事も意識して見なければ何も見えてこないし、物事を考える時は、その本質を捉える必要がある。との指摘がありました。

☆社協と行政の関わり（関係）☆

社協は行政が出来ない「漏れ」の仕事をするところであって、行政からの下請けではない。建物も行政から独立し、住民に対して民間性をアピールする必要がある。また、行政との違いとして、社協はいかに地域で支えられ、住民に頼られているかであり、それは住民自らが決めることであるとはなされていました。

☆まとめとして☆

誰もが健康で、安心して暮らせるまちづくりを目指していくために、自分が住んでいる地域で学習し、多くの住民（仲間）とともに対等・平等の立場でお互いに取り組みを進めていき、地域ボランティア（仲間づくり）を育てていくことが、地域福祉を担うこれからの社協の役割として重要ではないかと考えられる。

全国社協職員のつどい レポート

八女市社会福祉協議会 河野 文彦

私は、今回初めて全国社協職員のつどいに参加したのであるが、初めての参加という緊張感は全くといっていい程感じることがなく、二日間のつどいを終えることができた。

初めて参加する私にとって、そのような気持ちで参加できたということは、参加者を募集する導入の部分で、テーマが参加しやすいテーマであったことや、受付の際の雰囲気が事務的な堅苦しさではなく、また、挨拶も形式ばった挨拶ではなく、いつもしてくれるよ

うな笑顔で迎えてくれて、安心を与えてくれるような雰囲気を創りだしてくれていたからだと思う。最初から、それも受付の時からコミュニティワーカーとして、社協職員として、人と人との関わりの基本的なことを感じることができ、全国社協職員のつどいのすごさを思い知らされたような気がした。

そのような感じの中、全国社協職員のつどいが始まった。オリエンテーションでは、今が社会福祉のあり方が大きく変わる節目で、社会福祉協議会が今までと変わるという説明から始まった。しかし、その説明の中で言われたことで、今回の改革で社会福祉が明るくなったとは思えない。とあったが、それは自分にとってすごく重たい言葉となった。

それは、今までの福祉に対する捉え方にもあると思うが、福祉とは何なのかと考えてみる必要もあると思う。福祉とは、特別なことをしているのだろうか？私は生きていくための当たり前のことだと思う。

だから、明るくなったとは思わない。というのはその人の捉え方であり、見方であると思う。つまり、社会福祉という空気をどう感じるか、ということだろうと思う。

最初に雰囲気のことを書いたが、それと一緒でいかに雰囲気を創りだしていくのかにかかっていると思う。

それこそ今回のテーマにあった社協未来予想図ではないかと思う。社協職員が未来の予想図をどのように描くかによって社協の未来は明るくもなるだろうし、その逆になるかもしれない。

また、今回社協を考えていく中で、「住民主体」という言葉がいつの時も出てきたが、それこそ地域というのは、そこに場所があるということだけで地域があるのではなく、そこに住む人がいて地域というものを創りだしているのであるから、そこに住む人がその自分の住む地域をどのように描いているかによって地域性が出ていると思う。だからこそ「住民主体」でなければならないのではないだろうか。だからこそ自分達が住む地域は自分達が主体となって創りだしていくようにしていかなければならないのではないだろうか。

今回、全国社協職員のつどいで、毎日の仕事の中では感じることのできない貴重なことを感じることができ、とても有意義な二日間となりました。この全国社協職員のつどいを準備されてこられたスタッフ、関係者の皆様、本当に素敵な二日間をありがとうございました。

また、参加された職員の皆様、このつどいに参加できるようにしてくださいました地元社協職員の皆様、八女市社協職員の皆様、本当にありがとうございました。

これからこのつどいで学んだことを社協活動につなげていきたいと思います。

「やってみなけりゃはじまらない」

フリートーク

電光石火の二〇年

甘木市社会福祉協議会
前田　正剛

私は、甘木市社協に一九八一年（昭和五六年）国際障害者年の年に入り、早や二〇年が過ぎようとしている。

今思うとアッという間の二〇年で、甘木市社協には数年前に入ったような気がする。

実をいうと私は、不思議とこの二〇年の間に一度も仕事がおもしろくないとか、仕事に意欲がなくなったとか、社協をやめたいと感じたことがない。

もちろん、仕事への多少の悩みや、苛立ちを感じるときはあったが、深く悩むことはなかった。

今、振り返ってみると、社協の仕事に対する私のモチベーションをタイミング良く持ち上げてくれる、多彩な方々との様々な出会いがあったからだろうと思う。

そのいくつかの出来事を紹介する。

私が社協に就職した当時、県内各市町村社協の地域担当職員の配置状況は通常専門員一名体制で町村では事務局長が専門員兼務体制がほとんどであった。また、社協の財源状況も人員体制も貧弱で、地域からの福祉ニーズも現在のように多くなく、今のように複雑